

大館市の大館曲げわっぱ伝統工芸士仲澤恵梨さん(39)が、起業して工房の経営に乗り出す。曲げわっぱ業界での女性の独立は過去に例がないとみられる。仲澤さんはワークショップなども計画しているといい、「女性の視点を取り入れ、気軽に曲げわっぱに触れてもらえる工房にしたい」と意気込む。

大館曲げわっぱ伝統工芸士

仲澤 恵梨さん(大館市)

同市出身の仲澤さんは、工芸に携わりたいと考え、幼少期からものづくりが好きで、中学時代に曲げわっぱの小物入れを使ったのを機に、地元の伝統

は製造販売の柴田慶信商

学校を卒業後、曲げわ

るようになった。市内の

秋田職業能力開発短期大

は製造販売の柴田慶信商

車庫を改装した「曲げわっぱ工房 E-08」



製品に触れ、作る場を

店に入社。職人として制作に励み、2016年には伝統工芸士に認定された。大館曲げわっぱの女性伝統工芸士は現在、仲澤さんを含む2人だけだ。

「曲げわっぱは、使ってみるとその良さが分かる。弁当箱なら吸湿性や香り、手触り…。日々の生活、気持ち豊かにさせてくれる」と魅力を語る。また「弁当を詰めた箱を洗ったり、家事で曲げわっぱに触れる機会が多い女性の方が、良さを語れる強みがあるのではないか」と感じている。弁当箱なら吸湿性や

20年間勤めた柴田慶信商店を昨年9月末で退社。同市二井田の実家車庫を改装し、木造平屋約70平方メートルの工房を整備した。中古の製造機器をそろえた作業室のほか、製品を展示したり、ワークショップを開いたりできるスペースもある。名称

技術磨き独立、工房経営へ



完成した工房の前で製品を手にする仲澤さん

は「曲げわっぱ工房 E-08(いーわっぱ)」。

2月1日付で開業届を出しており、4月から本格的に稼働させる。

男職人ばかりの世界に飛び込み、技量を高めてきた。既婚で改姓したが、「伝統工芸士に認定された名前だから」と業界では旧姓を通す。これまで支えてくれた両親への感謝の気持ちも込めているという。

「女性も気軽に訪れ、曲げわっぱのアクセサリなどを作れる場にした。こちらからの押し付けではなく、お客さんの要望に応じてさまざまな製品に取り組みつもり」と仲澤さん。端材の活用も試みるなど、時代に即した経営を採っていく。

工房は個人経営で始めるが、いずれは会社組織を目指す考え。「この業界に入ってから、厳しさに耐えられずやめた人を見てきた。また志があれば、そういう人も雇い、個性を出し合って制作するのでもいい。曲げわっぱを次代につなぐための工房でありたい」と語る。

(菊池史利)